

鹿児島島嶼の列島性 —連続的地域特性の現地確認 (社会=生活環境・島嶼経営領域) —

長嶋俊介

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

Island Groups of Kagoshima Prefecture as the Chain of Islands — A Field Confirmation of the Continuous Area Characteristic Between Islands from Social and Livelihood Environmental Domain for Islands Management —

NAGASHIMA Shunsuke

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要旨

文化的・社会的・歴史的環境条件とそこでの営みや取り組みについて、南北連続空間性と関係性から確認した。鹿児島県内の島嶼を、南北つらなりを意識してほぼ踏破したが、ここでは、甌島諸島、徳之島・沖永良部島とその周辺地域との関係への言及に留める。島と島群の関係の方が、島と本土（鹿児島あるいは熊本）との関係よりも過去においては交通手段・交易上の都合から過去においてはしばしば強いものがあつた。取引と文化的な移行のための主なルートはこれら島嶼にそってのものであつた。これら島嶼は江戸時代の幕藩体制下の薩摩藩時代以来、鹿児島県に至るほぼ同一の行政単位に属している。しかし、政治的・歴史的理由によって、これらの島嶼群は1つの島グループとしては呼ばれてこなかつた。現在、それら束縛要因はなくなつた。さらに亜熱帯から温帯まで、飛び石のように適度に散らばりかつつながり多様であるこれらの島々を、最適なセンサーとして認識することができる。これらの島々を鹿児島列島として呼ぶことの便宜性が高まっている。

Abstract

A field confirmation was carried out for southern-northern island chain for continuation extensity and relationship in managements and endeavors within the cultural, social, and historic environmental conditions. We have performed research on almost all inhabited islands. The research route carefully considered the island positioning. This report focuses on Koshikizima Islands, Tokunoshima Island and their surrounding regions. Due to their historical connection in commerce and transportation, the relationship between the island and the island groups were stronger than to the mainland (Kagoshima or Kumamoto). This also acted as main route for trade and cultural transition. These islands have been part of the same governmental since the Satsuma shogunate government in the Edo Period. However for political and historical reasons these island groups have not been referred to as one island group. As for the present day, there are no longer reasons to maintain the constraint. Furthermore, these islands are appropriately scattered in temperate to subtropical climate zones; we can recognize them as the best sensor zone. Nowadays these islands are conveniently called as Kagoshima Chain Islands.

1 はじめに (列島性の根拠と調査概要)

文化的・社会的・歴史的環境条件とその中での営みや取り組みについて、南北連続空間性と関係性から確認した。鹿児島県内の島嶼を南北つらなりを意識してほぼ踏破したが、ここでは紙面の都合上、甌島と徳之島とその周辺地域との関係への言及に留める。

鹿児島の島々は「薩南諸島」「奄美群島」「琉球弧」「広義南西諸島(狭義南西諸島は周知の通り旧十島[ジットウ]村)」のいずれでも、甌島諸島(列島)・草垣群島・宇治群島や北薩の長島・伊唐島・獅子島・諸浦島、あるいは桜島・新島(別名燃島・離島振興指定島嶼)等が除外される。本学の総合的島嶼関与や、島嶼間および島嶼群間の文化的・社会的・自然生態系的・地形地質的連続性や相互連関を考えると、先述の名称はいずれもいかにも不都合である。

薩摩の琉球侵攻以降400年が経過したかが、略その全期間(例外は僅かに米軍統治の行政分離1946年2月2日決定から1953年12月25日までの7年半の期間の留まる)略同一位の関与をしてきた。その歴史的事実と一体性連続性から「鹿児島列島」と呼んで何ら不自然性・不都合はない。そこで本タイトルの表題をそれとした。本調査はその微妙な地域境の確認調査でもあった。

「列島性」の根拠は、道の島々としての、薩摩(ヤマト)と琉球の航路要所であったことに、由来するのみではない。古代貝の道以来の歴史がある。特に留意したいのは、鹿児島西域の通過航路である。それは韓半島までの北上航路でもあった。天草・長崎出島・長崎松浦(松浦党はこの航路をくだって、尖閣諸島をも拠点として、海賊行為と私的取引を展開した)と、つながる道筋であり、メインストリートの海路であった。

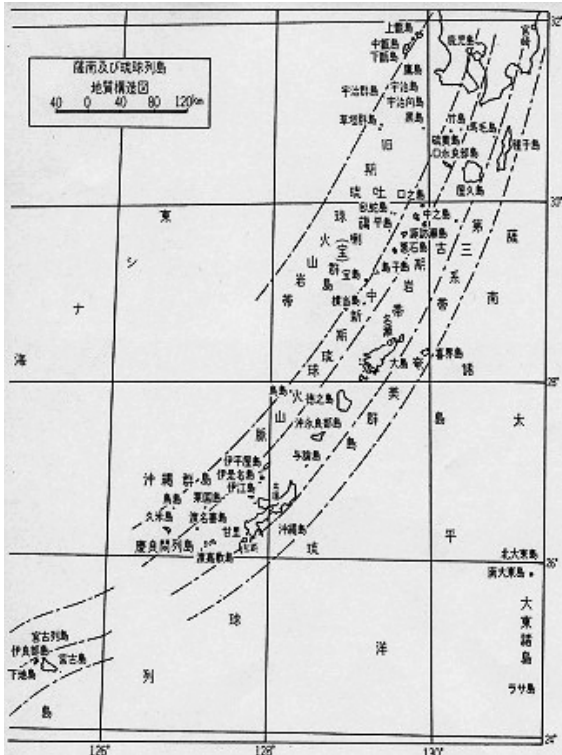


図1 鹿児島列島海底地形図

のところもあるが、喜界カルデラや同地の隆起型の島生成理由と関わる。しかしあくまで図1の基盤の上での追加的事実である。

いまひとつの関係性で重要なのは、島の生成経緯と地質の連続性にある。図1の西端の草垣・宇治・下甌・中甌・上甌は、海底の中では一帯をなす。その隣の火山列島線は活火山列で、海上からも顕著な列で、古代より航路上のランドマークとしての役出所)橋村健一『笠沙町郷土誌』上巻1991年p.31 割を果たしてきた。次の列には、奄美大島・徳之島・沖永良部島・与論島・沖縄本島・慶良間諸島・宮古島、北には屋久島が並ぶ。最東部の列は、世界的にも顕著な隆起が今も続く喜界島と種子島である。

これらの同期生成の同質・類似の地質・地形の上に生態系の基盤が展開されている(海進・海退の細かい話は現在の陸島の特質をもつ、生態系的個性と類似・独自性の根拠ともなる)。一部三島の島々や熊毛郡の島々のように東西並び

これに加えて、黒潮本流の先島からトカラを經由するラインと、一部は支流として対馬暖流へと流れていく西側ラインが、この列島性の形成を促している。

黒潮と関わるのが台風経路・強度と亜熱帯気候の島々をより北に押し上げている点である。それらも列島的特性を補強している。

無論人文的・歴史的史実はこの上に重なってくる。これらはまさに、奄美群島以北の鹿児島列島性の根柢なのである。その人文・社会環境的事実に関して、詳論するには一書が必要である。以下今回調査地である徳之島・甌島についての概要記載にとどめる。個別の例示的検証結果のみでも全島嶼についていつか詳論機会を得たい。また、島の豊かさの社会生活環境条件と営みに関する概念整理も報告書形式ではふさわしくないので割愛する。

2 徳之島

(1) 徳之島での知見

正月鬮牛の郷土（シマ）対抗的側面を確認の上、地元インフォーマント（徳之島郷土研究会会長本田碩孝氏等）の協力を得ながら、各主要点の現地確認を行った。集落構造と正月景観・埋葬儀礼の中に見る文化個性・精神世界の「奄美的原景」が、井之川・神之峰で確認できた。また部門別の専門家が複数いて郷土文化活動とその連携が出来ている。中規模島嶼ならではの特徴である。なぞの線刻石（群）はノロも利用したが、いまでも現地で謎とされている文化財である。しかも島内複数箇所が存在する。解明を期待したい。

(2) 南との関係性



写真1 しっかり守られた森中の聖域



写真2 海岸集落洞窟に設けられた聖域

ほぼ北限とおもわれるものが、トゥール墓（祖先の眠る聖域）の各地存在であり、洗骨儀礼は、南方系精神世界を象徴する。

(3) 西との関係性

65km西の鳥島（近年では硫黄鳥島と呼ばれている）は、琉球王国時代からそして今に至るも沖縄県に属している。直接的には泊港そして噴火避難・集落移転以降は久米島が直接の関係地となるが、最短近接地の徳之島とは、日常的・交易的関係が強く形成される。特に水と薪の調達は、深刻な飢饉や水不足対応での、依存地であった。硫黄生産衰退以降の自家豆腐生産用石臼や干物販売先としても、徳之島経由が主要ルートとなっていく。因みに図1のように、鳥島は火山列島の線上に確として存在し・鹿児島列島西

側境界地（経済的・政治的事由がなければ奄美群島内島嶼とみても不自然ではない:事実米軍射爆場計画では奄美群島漁民が反対運動を中央に向けて展開し、沖縄返還時にはリゾート地開発計画許可を1000km離れた久米島に対して働き掛けている）となる。その近接性を象徴する自然遺産としては、小島断層に顕著な鳥島火山灰断層部分である。

(4) 連続性の中の中核的位置

石干見（または魚垣）は南の島々との連続性を象徴するが、奄美大島でも今も各所に存在している。貝の道を象徴する高瀬貝・宝贝・夜光貝は、徳之島では今も良好な管理的漁獲がなされていた。これも喜界島までを含む連続域を形成している。最近ではこれを奄美博物館などと協働した、環境・歴史教育教材・加工のワークショップ等にも（工房海彩の池村茂氏が公益的な中核的リーダーとして）取り組み始めている。島唄・島口・八月踊り・豊年祭等各種儀礼的祭事も、連続的でありつつも、島の一定程度の大きさもあり、強い個性の残存する中核地の一つである。経済的には、花卉類・ジャガイモ（獅子島から沖永良部島までを含む南北性）・かんきつ類の海路輸送・南北の連続的島嶼性は、同一県内の時差出荷利益としても、特筆すべき利点を発揮している。



写真3 東海岸の石干見



写真4 表面を磨いた夜光貝

(5) 北との関係性

北とのつながりは、大きな島同士の物流・交流で維持されるが、その間にある与路島とも、親村小村関係が存在した。琉球王国時代、徳之島東海岸北端金見（カナミ）とその港山（サン）は、与路とは、同一の間切り（行政区画）に属しており、親ノロ（女性司祭者）は、サンに住んでいた。それが分村した経緯が「山（サン）と与路島節」で語られている。

- | | | |
|---|---------------|-------------------|
| 1 | ハレ 山（サン）と与路島や | ハレ 親祝女（うやのろ）や一人ヨー |
| | ハレ 舟割りやぬから | （アリヤコリヤ） |
| | からが ハレ 間切り分かそ | ヨーホンノ |
| | アレ 舟割りやぬから | （アリヤコリヤ） |
| | からが ハレ 間切り分かそ | ヨーホンノイ |
| 2 | ハレ 昔親祖先や | ハレ しま建てぬ悪さヨー |
| | ハレ 加那がしま吾し | （アリヤコリヤ） |
| | しま ハレ 間切り分かち | ヨーホンノ |
| | アレ 加那がしま吾し | （アリヤコリヤ） |
| | しま ハレ 間切り分かち | ヨーホンノイ |

この歌は、『奄美民謡総覧』南方新社2011年1月p.183-184に採録されている。「舟割

れ=難破事件があってから、間切りが分かれた。昔の親や祖先は、しま建=集落をつくること、が悪い。恋人の集落と私の集落を別々にしてしまった」との意味である。文英吉『奄美民謡大観』には、ノロと姪が与路に行く時、船主である役人が姪に惚れて、叔母を毒殺し姪を我が物にしようとしたが、姪が毒を飲み死んでしまう。ノロは呪い舟を沈め、以来間切りが分かれた（同p.611）とある。



写真5 金見（カナミ）集落



写真6 実業団駅伝合宿地の南限

徳之島は、奄美大島同様に実業団駅伝・マラソン合宿地としての適地である。最近では韓国からも多く訪れている（同宿したが写真は割愛）。しかしその南は、やや暖かすぎて、同地が現在では南限的に地位にある。他の球技などは、沖永良部島での合宿地として利用されている。これらは南北連続的の島嶼性で選択肢を広げて、マーケティング的にはスケールメリットを発揮している。

北との連続的生態系は、多様に存在するが、アマミノクロウサギ（徳之島が南限地）の存在は、この島の山奥の深さと豊かさを象徴する。新しい糞も日常的に観察できるポイントも大切に確保されている。（野犬・野ら猫対策条例化も始まっている。）なお琉球イノシシも頻繁に出没し、真新しい掘り起こし跡が、山間部では随所にみられる。



写真7 山中のダム湖岸の観察施設



写真8 クロウサギの真新しい糞

3 甑島列島および北薩の島々

(1) 北薩の島々と天草諸島

北薩の島々は、言語文化圏的には完全に天草諸島の延長上である。地質的にも、恐竜化石で有名な御所浦島の延長であり、獅子島でも同類の化石が数多く発見されている。植生的にも同様の連続性があり、県境はあくまでも歴史的・政治的である。この地域は

赤土で馬鈴薯生産適地であり、南北列島性生産時期調整で、獅子島・長島・伊唐島とまとまることで、県内時差連携を実現する上での重要な北部拠点をなしている。

(2) 甌島の北とのつながり

上甌島では郷土史家小川三郎（鹿児島民俗学会会員）氏の協力を得て調査をすることができた。特に漁撈と俵物生産史に詳しい。

甌島と本土よりも、甌島と天草の方が、航路的・経済的にもつながりが強い時代が戦前期にはあった。長崎とのみ定期航路があった時期が、確かに昭和3年まであった。地域文化経済圏はあくまで長崎と天草（牛深）であった。また平成14年まで大型フェリーが、串木野と長崎間で存在していた程に、経済的なつながりは、その後も存在していた。

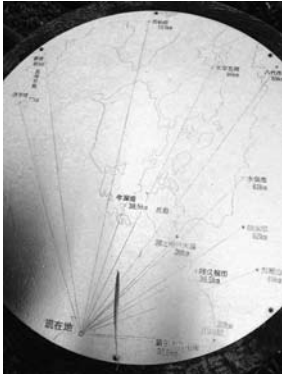


写真9 田ノ尻展望台の方向版



写真10 甌（鹿児島県所属なのに）定期船の名前が長崎

田ノ尻展望台（長目の浜北部）からの距離図では、牛深港38.5km, 阿久根市36.5 km, 川内川33km, 黒之瀬戸39km, 野母崎77kmとある。長崎との関係は、干なまこと干アワビのこの地での生産史も深く関わっている。

また末端地は隠れ信仰の場にもなる。一向宗はその一つで大弾圧を受けるが、かくれ念仏跡地が各所にある。また長崎・天草と並んでキリシタン文化受け入れ地である。初期には1602年長濱出身洗礼者が4人の神父と一人の修道士を伴って上陸した。当時は薩摩藩主による公式の招聘であった。1637年島原の乱の残党35名が崖下洞窟潜伏地にかくれていたところ発見され、1638年処刑され殉教の地となった場所もある。またかくれキリシタンの里（手打青瀬地区）も存在する。その意味でも甌島の北連なりは、歴史的文化的でもある。



写真11 長濱の宣教師上陸地碑



写真12-13 下甌南西端釣掛崎断崖の殉教地記念碑

(3) 甌島の南北両方からの文化的影響

下甌島トシドン保存会の羽地氏にお会いし、地元の取り組みと意識について取材した。年末特別許可で拝見する予定だったが欠航してかなわなかったが、前日から入った方々は拝見できていた。彼らも下野敏見鹿児島大学名誉教授を招いての講演などで学んでいた。その資料によると、北のなまはげ（年末・子どもへのしつけという類似性は関係性を伺わせるが、）その影響も受けつつも、南の仮面神（三島・十島）との関係の方が強いとされる。保存会の人々は公開しないことでの「しつけ効果」への拘りを大切にしていた。内部でも深く議論したうえで結論でもあった。



写真14-15 現地受け入れポスターと女木島（香川県）鬼の館の展示物

[大晦日、仮面にカヤ蓑やマント、毛布などを身につけ、手に棒を持って、子供たちの悪い行いをたしなめ、トシドン餅（年餅）を与える]とある。

ユネスコの無形文化財遺産指定を受けてから、見学希望者が殺到するようになったので、また合併した市の意向もあり、一部限定的受け入れを開始したとのことであった。隠れキリスタンと同殉教地は、隔絶島嶼の文化個性であり、トシドンと共に地元も自覚する「周縁=辺境」の文化個性事例である。

この習慣は、甌島からの移住地（台風基金などで特に種子島北部への畑作移住は規模も大きかった）でも継承されている。それほど躰文化は尊重され伝承されている。

(4) 甌島から西域=大陸と国境への意識

江戸時代末期には甌島にも遠見番所がおかれた。現在では航空自衛隊のメガレーダーが国境・空域管理をしている。ナポレオン岩を見下ろす「しんきろうの丘（往診の医師が峠から西に林立する白色のビル街を認めた）」からは、中国大陸を意識する人もある。



写真16 下甌のメガレーダー



写真17 曇気楼の碑

(5) 甑島の南海域や琉球とのつながり

甑島と南の関係も深い。南特に琉球から（あるいは外国船の）長崎や朝鮮への航路、牛深や瀬戸内（下関経由）や日本海（北前船）向けのメインストリートでもあった。

天保7年3月幕府の唐物係が串木野にやってきて、「甑島産らしき干し鮑が琉球に持っていき、唐物の買い入れをしている」らしいということについて浦人を集め調べたとの記録がある。また小川氏の父親の時代、「甑明鮑（めいほう）」というブランドで出荷した。明鮑の南限地で、戦前の甑島は俵物で栄えていた。[小川三郎「漁撈と民俗随想」『鹿児島民俗』No.124, pp.20-28, 2003年]

琉球人墓が里の西願寺にある。1840年鹿児島に向かう船の難破座礁で溺死した二人の琉球僧の墓である。7回忌に琉球からわざわざ石碑を高僧二人が届けたものとされる。また下甑長濱には琉球焼が残っている。これらは沖縄との海域ルートの近接性を象徴する。



写真18 琉球人墓（上甑里）



写真19 琉球焼（下甑郷土館:手打）

甑島からは明治中期ごろから宇治群島・草垣鷹島付近まで、宝石珊瑚採集に行っていた。最高の水揚げ船には優勝旗が会社から贈与されていた。

三島・十島とは仮面文化のみではなく、遠島流刑地繋がりに関わりあいもあった。大炊御門中将頼国・松木少将宗隆が1609年薩摩硫黄島に配流の後、薩摩の配慮と交渉もあり甑島に移されている。



写真20 松木少将の墓
（薩摩硫黄島から配流先を移された）



写真21 草垣・宇治群島への珊瑚出漁
優秀者に向けての表彰旗（下甑郷土館）

種子島への大量移民については先述した。

黒潮の影響は、産業面でもある。追い込み網漁法は、仕掛け網漁とともに、経済的殷賑の過去を支えていた。糸満の影響も伝えられている。

暖流と植生の関係も大切である。北限地へごがその象徴的でもある。芙蓉フヨウ（木芙蓉、*Hibiscus mutabilis*はアオイ科フヨウ属の落葉低木）は、この地での生育がよく、木の繊維を使ってビー（芙蓉）ダナシ（筒袖の着物）という織物にも使われている。クズでも同様の地機織りクズダナシがおられていた。



写真22 ヘゴの木
(野生ヘゴの北限地)



写真23 芙蓉・葛繊維の織物
(下甑郷土館)

(6) 海底地形と列島性

中甑島の池掘削港湾は避難港・漁港として経済的柱であった歴史が重い。これは元火山島カルデラとして鹿児島列島構造につらなる。また深い海底地形を利用した深層水は、産業的模索と展開を続けている。



写真24-25 甑島海洋深層水プロジェクトは2003年始動した

(7) 平成の大合併と「行政過疎」

甑島4村（里村・上甑村・鹿島村・下甑村）は平成の大合併で薩摩川内市に併合された。島のことに専念して企画を続けるヘッドクォーターの機能低下と、村誌編集主体の島内喪失や郷土研究・資料蓄積力の低下が懸念されている。



写真26 島単位での地域誌記録が応分の努力なくして持続確保困難になり始めている。

写真27 人口過疎化に伴う島の活性化にIターン・留学生誘致が画策されている。